

「日々の理科」(第2080号) 2020,-3,20

## 「世界一安い化石レプリカ(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

1個2円以下の三葉虫のレプリカづくりは、なかなか楽しかった。私はこの作業を、休み時間に教室で少しずつ進めていた。6年生の子どもたちは「あー、また田中が何か作ってるぞ!」とばかり、私を取り囲んで、興味津々に作業を「観察」していた。



109個の紙粘土製のレプリカを作るのは、それほど大変ではなかった。チョコレート工場の職人にでもなった気分で作業すれば、いつの間にか終わる。この作業に限らず、大抵のことは「慣れた頃終わる」という法則がある。たぶん、「教師」という仕事そのものも「慣れた頃終わる」のだろう。



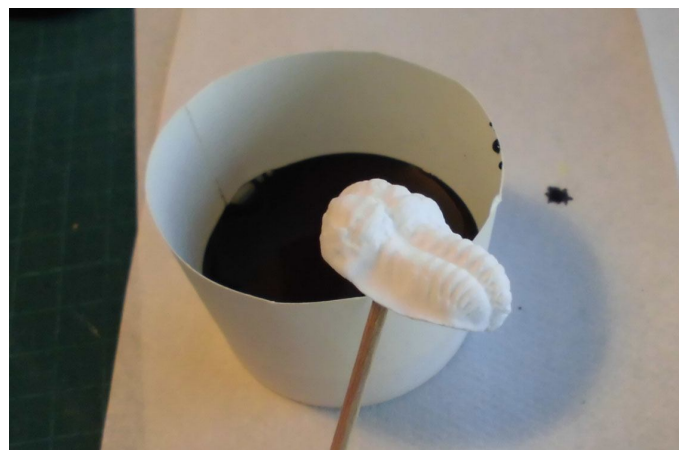
私は更に実物の「フレキシカリメネ」という三葉虫らしい立体感を表現しようと、二度塗りをしてみた。こうすると、凸部が濃い色になり、確かに立体感が出る。しかし「品質管理」の面から言うと、少々「出来」にバラつきがあるのが気になった。



そこで、もう一つの方法を試すことにした。「塗る」のではなく「漬ける」方法だ。まずは、水彩絵の具の「セピア」(こげ茶色)を紙コップ(切断した下半分)に入れる。



そこに、絵の具の量の約2倍の水を入れて、割りばしなどでよく攪拌する。とかしたチョコレート程度の粘度がちょうど良い。



そこに、紙粘土の三葉虫を「漬ける」。紙粘土は一昼夜置いて完全に乾燥させること。その後底面に「竹串」(焼き鳥の串)を刺しておく、作業が非常にやりやすくなる。